

## 身近なエコ活動

七日開幕の主要国首脳会議（北海道洞爺湖サミット）は、地球温暖化防止が主要テーマの一つ。ただ、私たちの暮らしを見直し、環境の真実を食い止める主役は、政治家に限らず、やはり一人一人の市民なのだろう。地球規模で考え、地域で地道な温暖化防止活動を続ける広島県内の三つのグループを紹介する。

（一面関連）

ストーブに木質ペレットを入れて点検する  
早田理事長（左）



### 森のバイオマス研究会

特定非営利活動法人（NPO法人）庄原市

この夏、庄原市東本町（せが、最高気温が二五度）にある研究会事務局で、例年ない現象が起きていた。ペレットストーブは、これまで秋と冬に「原油価格の高騰が主原因です」と。竹常明が灯油の半値近くにな

せが、最高気温が二五度、仁事務局長（54）が解説する。ペレットストーブは初期投資が高つくことが導入の障害だったが、

## 間伐材でストーブ燃料

り、注目度が上がった。市で計一粉の森林の保全整備も進める。市民参加型の森の手入れ講座、里山を会場にしたコンサートなど、森に親しむイベントも定期的に開いてきた。これらの活動が認められ、六月には環境省のユービジネス創出につながる地域環境保全功労者表彰を受けた。

現在、県内三百台分の木質ペレットはほとんどを県外の業者から購入している。しかし研究会の理事長を務める明治大教授の早田保義さん（54）は「需要は着実に増えている。ペレット生産事業が県北で成り立つ可能性が見えてきた」。原油高騰で、県内でこれまでに三百台が導入された。年と環境意識の高まりを間約三百台分の木質ペレットの需要を生み出した。研究会は庄原、三次両市、どの手ごたえを感じている。（梨本島夫）

# 庄原の里山に共生学ぶ

## 明治大農学部生 草刈り・間伐材で木工



清水さん（右端）の指導で遊具作りに  
励む学生たち

じっくり里山暮らし 原地区を訪れ、農林業を体験しようと、明治大農学部学生6人が、庄原市川北町黒田でいた明治大の早田保

義教授が、ウッドクラフト工房「のんき工房」を主宰する清水宮雄さん（70）と地域住民に呼びかけて初めて実現。

十八日から六日間、農作業などに汗を流しながら、地域住民との交流を深めた。

「自分で考え、汗をかき、自然とともに暮らす」をテーマに、慣れない作業に戸惑いながら水田のあぜ草刈り、豆腐づくり、木工などに取り組んだ。

工房に隣接する空き

地では、清水さんの指導で地域の子どもたちのため、遊具作りにも挑戦。学生が近くの山林から間伐材を切り出し、高さ約三層の木登り遊具やテーブルとイスのセットなどを作った。同大三年の新宮良治さん（20）は「地域の人の温かみ、豊かな自然が貴重な体験になった」と喜んでいった。

（戸田剛就）